



埼玉県のマスコット コハドン

ラ イ ブ ・ レ タ ー
Lib. Letter

2013 Spring [2～5月]季刊

平成25年2月23日 通巻 第31号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

まんだら
「曼荼羅」の世界
— 密教の世界観をのぞく —

日本においては、「マンダラ」という用語はとても幅広く使われています。しかし、その中でも最も有名なものは、やはり密教美術としても知られる「曼荼羅」でしょう。美術としてその美しさや神秘性に触れることは比較的多い曼荼羅ですが、その本来の定義や内容について詳しく知る機会はありませんと言えるのではないのでしょうか。単純には「密教の世界を構成する諸尊を、一定の規則に従って図式的に配列したもの」という定義なども見られますが、それだけではとても語りつくせない内容が、曼荼羅の中には込められています。そこで今回は、ごく簡単にではありますが、曼荼羅についてご紹介してみることにしましょう。



■「曼荼羅」とは？

◆「曼荼羅」の語源と種類

もともと「曼荼羅」は密教経典にあったサンスクリット語のマンダラ (maṇḍala) の音写語で、その漢字自体に特別な意味はありません。表記法には他に曼陀羅、曼拏羅、漫荼羅などがあります。サンスクリットの maṇḍala は〈本質〉〈心髄〉(醍醐) を意味する語基 maṇḍa と、所有を表わす接尾辞 la を合成した語と解釈されます。意識としては「本質を得るもの」「本質を図示・図解するもの」とされ、この本質とは仏教における真理＝仏の最高の悟り(無上正等正覚)を示します。仏教では、旧訳で「壇」、新訳で「輪円具足」、「聚集」と訳します。特に「輪円具足」は曼荼羅を表わす言葉としては有名で、これは曼荼羅がそれだけで円のように一切が完全で、過不足なくすべてを含むものという意味が込められています。

◆密教

密教は、大乘仏教からの流れの一つで(後期大乘仏教とも称されます。)、顕教(広く民衆に向かって説かれ、その世界観を明瞭な言葉で説く通常の仏教)に対し、自己を非公開的な教団の内に閉鎖し、秘密の教義と儀礼を師資相承によって伝持する秘密仏教をいい、象徴主義的儀礼ないし観修法によって宗教理想を達成しようとする特徴を持ちます。

インドでは2世紀末ごろから大乘仏教が発達し、4世紀ごろから除災招福のいわゆる雑部密教(= 雑密、初期密教)の經典化が盛んに行われました。4～6世紀のグプタ期全期を通じて、仏教における儀礼儀式、真言、印契、曼荼羅などが発達し、7世紀中期の『大日経』と、7世紀末～8世紀初期の

『^{こんごうちやうきやう}金剛頂經』の両部の經典の成立により、組織的、体系的な^{じゆんみつ}純密（＝純粹密教、中期密教）が完成したとされます。※ちなみに、後期密教は「タントラム教」と称されますが、これは日本にはほとんど伝わることなく、チベット・モンゴル等を中心とし、元代に中国・朝鮮に伝播したと言われています。

密教は断片的には7世紀後半にはすでに日本に伝えられていましたが、体系的なインド中期密教を初めて請来し、日本的に再構成したのは、天台宗の開祖伝教大師最澄と真言宗の開祖弘法大師空海でした。最澄と空海は、延暦23（804）年に共に入唐し、最澄は、天台、戒、禪を主として学び、あわせて順暁から密教の付法を、大素から雜密法を受け、一方空海は、恵果から両部密教を皆伝されました。帰国後、空海は独自の教判論を打ち立て、ダイナミックな思想体系を持つ真言密教（東密）を完成させることとなります。

◆密教と「曼荼羅」

みなさんが一般に「曼荼羅」と聞いて思い浮かべられるのは、寺院などに掛けられている掛図が多いことでしょう。しかし、先に紹介したとおり、曼荼羅の本来の意味は「本質を得るもの」であり、必ずしも現在のような絵図のみを指すものではありません。悟りの世界そのものを指すことなどもあり、最も大きな曼荼羅の分類法としては、以下の3つがあります。

- (1) ^{じしやう}自性曼荼羅：一切の存在の背後にある悟りそのもの
- (2) ^{かんそう}観想曼荼羅：観想によって(1)の曼荼羅を心の中に建立したもの
- (3) ^{ぎやうざう}形像曼荼羅：(2)の曼荼羅を図画や尊象などで具体的に表現したもの

大乘仏教が発達するにつれて、釈迦のみならず、すべての人が悟りうる^{たね}種子（菩提心）を宿しており、それを育成することによって、みずからのうちにも悟りが開かれるとする考えが現れました。その境地を心に留めたものが自性曼荼羅です。

また、密教の經典の冒頭には、如来はその超能力によって、説法に集まった衆生に仏の世界を〈観せる〉が、のちに衆生も観想の法を段階的に修行することによって、みずからの力によって仏の世界を〈観る〉ことができるようになる、という話があります。このように観想によって仏の世界を心に描いたものを観想曼荼羅といいます。

しかし想念を凝らし、自ら仏を観ることはなかなか困難です。それゆえ、観想によって得た仏の像を、壇上や画像に描いたり、あるいは壇上に^{さんまやぎやう}仏像や三昧耶形などを配列したりする形像曼荼羅が作られるようになったわけです。そして、この形像曼荼羅が一般にわれわれが密教の「曼荼羅」と呼んでいるものにあたります。

形像曼荼羅は、さらにその形態・表現から、「^{だい}大・^{さん}三・^{ほう}法・^{かつ}羯」とも略称される「四種曼荼羅」に分けられます。

(1) ^{だい}大曼荼羅 (mahā-maṇḍala)

仏・菩薩などの諸尊の姿を描いたもので、尊形曼荼羅と呼ばれることもあります。ここでいう「大」とは、密教でいう「六大（地・水・火・風・空・識）」をいい、宇宙の根源をなすもの（本質と働き）を指すと同時に、仏の営みそのものをも指すと説明されています。

(2) ^{さんまや}三昧耶曼荼羅 (samaya-maṇḍala)

曼荼羅に描かれる仏や菩薩の持ち物（刀・宝珠・蓮華・金剛杵などの法具）には、その諸尊の誓願によってそれぞれ特徴があります。諸尊の姿そのものの代わりに、その特徴をもった持物あるいは印契だけを描いたものを^{ひやうじ}標幟または三昧耶形といい、それで表現された曼荼羅を三昧耶曼荼羅といいます。

(3) ^{ほう}法曼荼羅 (dharma-maṇḍala)

^{しゆじ}種子曼荼羅ともいいます。諸尊をそれぞれ固有の梵字（真言）で象徴するものです。

(4) ^{かつま}羯磨曼荼羅 (Karma-maṇḍala)

諸尊の威儀の姿、所作の働きを示したものです。実在の象徴的表現として、立体的に諸尊を木

造、銅造（鉄も）、塑像などで構成・表現します。

また、構成の仕方による分類法も存在します。大日如来を中心に諸尊のすべてをもって構成した2種の曼荼羅を総称した両部（両界）曼荼羅と、特定の修法に特化した本尊を中心とする別尊曼荼羅の二つがその代表的なものです。

密教にはなぜ曼荼羅が必要とされたのでしょうか。曼荼羅を日本に請来した空海は、帰朝後の最初の編著である『請来目録』の中で、このような内容のことを述べています。

「密教の世界は非常に奥深くて文章で表現し尽くすことはむずかしい。だから図画を仮りてまだ覚りを得ていない者に開き示すのである。」※「密蔵は深玄にして翰墨に載せ難し。更に図画を仮りて悟らざるに開示す。」

言語文字は簡略で伝えがたいから、たとえば曼荼羅という絵画的表現が必要である、ということであり、つまり曼荼羅とは、言葉では伝えきれない真理を描き表わした、密教における「字のない教科書」という考え方ができるのかも知れません。

■「両部曼荼羅」を観る：胎蔵曼荼羅と金剛界曼荼羅

◆両部曼荼羅

両部曼荼羅とは、空海（弘法大師）が唐から持ち帰った密教における代表的な2種の曼荼羅のことを言います。残念ながら、当時空海が持ち帰った曼荼羅は、儀式などで頻繁に用いられたため著しく破損し、現存するものはないとされています。

現存する日本最古の曼荼羅は、空海が淳和天皇の発願で京都の高雄山神護寺の灌頂堂に金銀泥で描いたとされる、天長6（811）年に完成したもの（高雄曼荼羅）です。

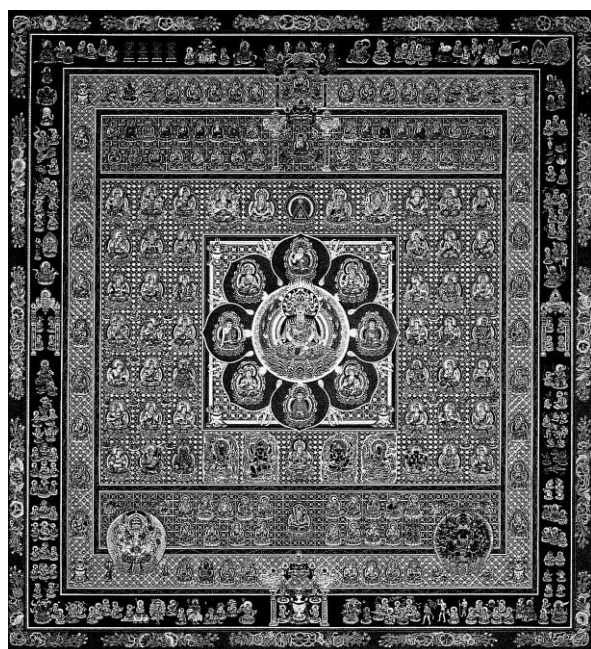
両部曼荼羅は、先に述べた純密の世界では「両部の大経」と呼ばれ重視される二つの経典に基づいて描かれています。『大日経』（正式名称は「大毘盧遮那成仏神変加持経」といいます。）由来の『大悲胎藏生曼荼羅』（『胎蔵曼荼羅』『胎蔵界曼荼羅』などと略されます。）と、『金剛頂経』由来の『金剛界曼荼羅』の2部を総称して、「両部曼荼羅」と呼ぶわけです。金剛界曼荼羅に対応させて胎蔵「界」曼荼羅と称することもあるため、「両界曼荼羅」という呼ばれ方をすることもあります。なお、先に述べたように両部ともに空海が持ち帰った曼荼羅そのものは現存しませんが、それを写し伝えられてきた現在の形の曼荼羅は『現図曼荼羅』と呼ばれています。

また、この2部の曼荼羅は日本では「理智不二」「金胎不二」などと称され、「相即不離」の関係にあるものとされています。「理智不二」にいう「理」とは胎蔵曼荼羅の世界を指し（よって、胎蔵曼荼羅は「理の曼荼羅」と呼ばれます。）、一方「智」とは金剛界曼荼羅を象徴した語です（よって、金剛界曼荼羅は「智の曼荼羅」と呼ばれます。）。

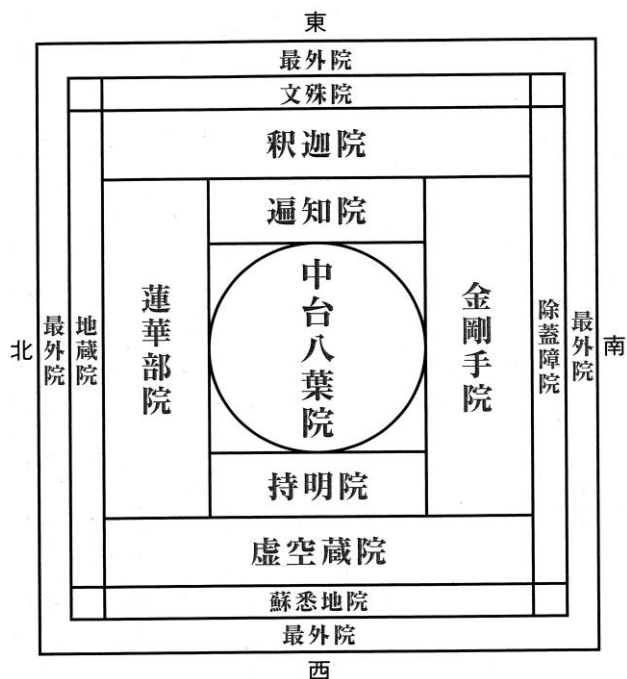
胎蔵曼荼羅は、仏教における真実の道理の世界を表わした、いわば悟りの境界を開示したものとされます。女性が慈愛をもって胎内で生命を育み生み出す営みのように、大日如来の悟りが慈悲により衆生にまで展開する理を示しているものです。一方の金剛界曼荼羅は、大日如来の金剛不壊なる悟りの智慧の働きを示しており、この理と智は表裏一体であるとする考え方から「理智不二」と呼ばれることになったものです。

両部曼荼羅は、ともに最上位の仏として大日如来（正式名称は「大毘盧遮那如来（マハー・ヴァイローチャナ・タターガタ）」）を中心に据え、その周りにその他の諸尊が配されています。ただし、胎蔵曼荼羅に描かれる諸尊には重複はなく同じ仏は一度しか登場しませんが、金剛界曼荼羅には大日如来も含め、同じ仏が何度か登場します。

胎藏曼荼羅は『大日経』所説のもので、十二大院のグループから構成されています。仏像は曼荼羅内に合計414尊（410尊、444尊という資料も）が描かれています。

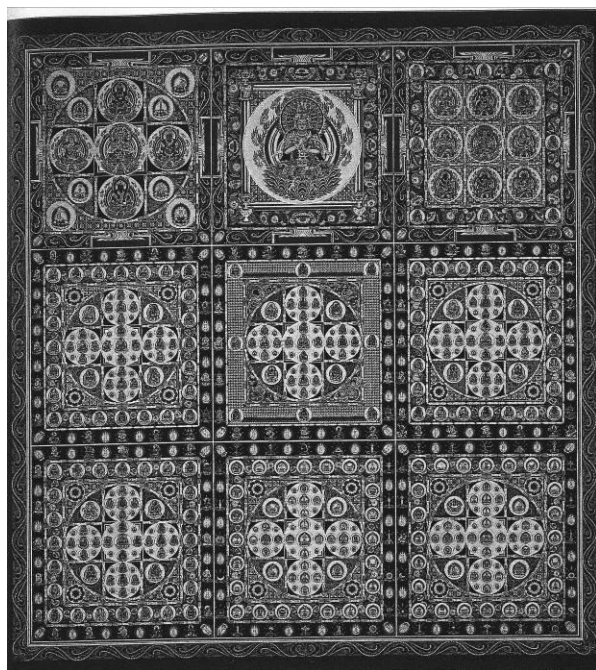


観蔵院・胎藏曼荼羅



胎藏曼荼羅の構造（東を上にして用いる）

金剛界曼荼羅は、『金剛頂経』所説のもので、画面を九会とよび、九つに区画されたグループから構成されています。仏像と三昧耶形と呼ぶシンボルさんまいぎようが描かれ、合計1,461尊あります。胎藏曼荼羅より画面・構成図は整然と区別され、シンプルです。



観蔵院・金剛界曼荼羅



金剛界曼荼羅の構造（西を上にして用いる）

※曼荼羅の写真および構造図ともに『図解・曼荼羅の見方：カラー版』（小峰彌彦／著 大法輪閣 2009.9）より引用

如来・菩薩・明王・天

密教を含めた大乘仏教に登場する諸尊は膨大な数に上ります。こうした諸尊を大きく分けると、「如来」「菩薩」「明王」「天」という四種になります。

如来：「悟り」を開いた者（仏陀）を指します。狭義での「仏」にあたります。

菩薩：如来に順ずる存在で、在家のまま衆生を救うべく修行している存在をいいます。

明王：密教に特有の存在で、誤った道に進む者を憤怒の形相で悟りに導く存在をいいます。

天（部）：仏法守護に携わる神々をいいます。他教の神々も多数取り入れられています。

曼荼羅では、大日如来はすべての仏たちの頂点であると同時に、諸尊と同一の存在であるとされています。ですから、これらの諸尊に本質的な違いはありません。すべてが大日如来の化身であり、すべての諸尊の本質は大日如来なのです。とはいえ、護衛を司る存在（天）と護衛される本尊（如来）が同一人物（？）というのも、ちょっと不思議な感じがしますね。

■さまざまな「曼荼羅」

◆別尊曼荼羅

大日如来を中心とした集合図である両部曼荼羅に対して、それ以外の諸尊（釈迦如来・弥勒菩薩など）を中心とした曼荼羅も存在します。こうした曼荼羅は別尊曼荼羅と呼ばれます。

別尊曼荼羅は、密教の数多くの現世利益（げんぜりやく）に基づいて制作された個別の尊像曼荼羅で、祈祷・修法を行う別尊法の本尊です。仏部、菩薩、明王、天部や経法（きょうぽう）に区分けされ、数多くの曼荼羅が現存します。中央に礼拝者の祈願にかなう本尊を配置し、周囲に七宝が描かれる形をとります。この別尊曼荼羅の前で公家、縁者一族などが止雨、除病、延寿を祈っていました。

別尊曼荼羅の現存する平安・鎌倉時代の作例は両部曼荼羅より比較的多く、伝釈迦曼荼羅図、虚空蔵曼荼羅図、仏眼曼荼羅図、尊勝曼荼羅図、一字金輪曼荼羅図、法華曼荼羅図、童子経曼荼羅図、宝楼閣曼荼羅図、仁王経曼荼羅図、弥勒曼荼羅図、八字文殊曼荼羅図、愛染曼荼羅図、星曼荼羅図、吉祥天曼荼羅図、閻魔天曼荼羅図、十二天曼荼羅図などがあります。これらの曼荼羅に掲げられる中尊は、以下のように分類できます。

- ①**如来中心**：法華、請雨経、宝楼閣、菩提場などの曼荼羅。
- ②**仏眼・仏頂中心**：仏眼、一字金輪、六字経、尊勝、北斗などの曼荼羅。
- ③**菩薩中心**：如意輪、八字文殊、弥勒、五大虚空蔵、五秘密などの曼荼羅。
- ④**明王中心**：孔雀経、仁王経、愛染、十二天などの曼荼羅。
- ⑤**天中心**：閻魔天、童子経、吉祥天などの曼荼羅。

◆外国の曼荼羅

曼荼羅はインドに発したものですので、もちろん日本のみにあるわけではありません。インドから北方にはチベットへ、南方にはジャワ、バリにまで、曼荼羅の影響を見ることができます。なかでもチベット仏教には実に数多くの種類の曼荼羅があることが知られています。また、外国の曼荼羅の場合、図画のみならず、壁画や立体的な曼荼羅が多いのも特徴です。これは、もともとインド密教では、円形または方形に一重ないし数重の土壇を築いて、諸尊の像を配置したり描いたりして修法を行っていた（このような立体的な壇が本来の曼荼羅です。）ことが影響していると考えられます。ちなみに、インドに古

い曼荼羅が遺存しないのは、修法が終わるや直ちに破壊してしまうためだそうです。

チベットの曼荼羅は後期密教（タントラ仏教）に属するものが多く、金剛頂経系のもの（金剛界曼荼羅）が大部分で、その古様の形式が西チベット（国境的にはインドに入るもの）に伝存しています。アルチ村（西チベットのレー〔Gle〕の西）にあるゲールック派のアルチ・ゴンパ三層堂には十三壁画の彩色画が残されています（時代は13～15世紀ころ）。ほかにインド北部のラダックには悪趣清浄、一切智大日、釈迦、般若波羅蜜の曼荼羅があります。

なお、高度な技術を要する立体曼荼羅（ルーラン・キンコル〔blos bsan dkyil hkhor〕）も若干現存します。これは仏塔形式のもので、大宇宙の真理と巨大な仏身を観想するチベット曼荼羅のシンボルです。また、南方では、ジャワ島の有名な仏跡ボロブドゥールの大塔は、普賢金剛薩埵^{ふげんこんごうさつだ}の立体曼荼羅ともいわれています。

■「曼荼羅」思想の展開

曼荼羅のもつ、すべてを包含する統一感や世界観はそれを観る人々にとって非常に魅力的なものだったようです。そのためか、曼荼羅は本来の密教的な教義を示すものから展開して、一風変わった「曼荼羅」群を生み出すことになりました。

◆ユング心理学と曼荼羅

心理学用語に〈マンダラ（mandala）〉という語があることをご存知でしょうか。スイスの精神科医で心理学者のC. G. ユングは、4つの門のある聖域を中心に幾何学的な図型を描くチベットの曼荼羅図に心理学的な意味を見いだしました。ユングは自分自身の体験と多くの患者たちの観察において、しばしば曼荼羅と同様なイメージが（外的な世界からの情報とは関係なく）その人個人の内的なイメージとしてあらわれることに注目しました。ユングによれば、曼荼羅風の図型は、意識の中核をなす自我とは別に存在する無意識も含めた、個としての人間の心理全体（であるとともにその中心）であり、さらに意識の領域と無意識の領域との調和をはかる超越的な機能をもつ自己の心理的イメージでもあるといっています。心理学における「箱庭療法」や「絵画療法」において、心が調和と統合に向かう過程で「曼荼羅」的表現がよく出現するとされています。

◆^{すいじゃく}垂迹曼荼羅

日本における神仏習合の考え方の中で、神道の神々を、仏教の諸仏が衆生に合わせて「仮に姿を変えて現れたもの」（垂迹）だとする思想を本地垂迹説といいます。この発想から、特定の神社の祭神を本地仏（本来の姿の仏）または垂迹神（神の姿を取っている仏）として曼荼羅風に表現したものを「垂迹曼荼羅」と言います。これには多くの種類があり、本地仏のみを表現したもの、垂迹神のみを表現したもの、両者がともに登場するものなどがあります。代表的なものは熊野曼荼羅、春日曼荼羅、日吉山王曼荼羅などですが、これらはそれぞれ、和歌山県の熊野三山、奈良の春日大社、比叡山の鎮守の日吉大社の祭神を並べて描いたものです。

垂迹曼荼羅はその参詣の対象によって、宮曼荼羅、山岳曼荼羅などの形を取ることもあり、また、参詣曼荼羅と呼ばれるものの中には、他の曼荼羅には珍しい参詣者が描かれているものもあります。

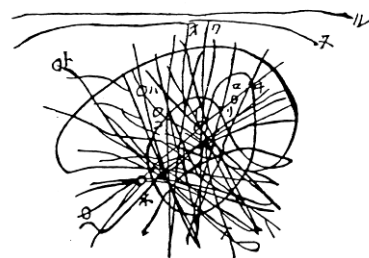
◆浄土曼荼羅（観経曼荼羅）

もともと中国では「浄土变相図」と呼ばれていた阿弥陀如来信仰の宗教絵画は、日本に来て「浄土曼荼羅」と呼ばれるようになりました。「観無量寿経」などの經典に説く阿弥陀浄土のイメージを具体的

に表現したもので、本尊がある点、諸尊が配置されている点など本来の曼荼羅と類似したところもありますが、もともとの定義からは異なるもので、やはり「曼荼羅風」の表現と言えます。日本の浄土曼荼羅には図柄、内容などから大きく分けて智光曼荼羅、当麻曼荼羅、清海曼荼羅の3種があり、これらを浄土三曼荼羅と称しています。なお、資料によっては、浄土曼荼羅は本来の「曼荼羅」との違いを明らかにするために「曼陀羅」という表記を用いているというものもありますが、必ずしもそういう表記で統一されているわけではないようです。

◆^{みなかた}南方曼荼羅

インド哲学者で仏教学者の中村元氏が、鶴見和子氏より紹介された南方熊楠^{みなかたくまぐす}の書簡にあった図版を見て命名したものだと伝えられています。一見するとまるで落書きにしか見えないような不思議な図ですが、この図が南方熊楠と当時高野山の管長をしていた土宜法竜^{どきほうりゅう}との書簡に見られたこと、またこれらの図に関しての南方の書簡に「曼荼羅」について触れられた箇所があることから、鶴見氏はこれらを南方の真言密教の思考による独創的な「科学の方法論モデル」として紹介しています。



『南方曼陀羅論』

(鶴見和子／著 八坂書房 1992.9) より

「お釈迦様」はどこに？

仏教の開祖は釈迦（ゴータマ・シッダールタ）の筈なのに、曼荼羅の中央に位置しているのは大日如来です。これはどういうことなのでしょう？

仏陀 (buddha) として知られる釈迦牟尼如来は、雑密以前の曼荼羅では中央に描かれることも少なくありません。しかし、純密の確立によって、密教の中心的存在は、釈迦如来から大日如来に移っていくことになります。

そもそも1～2世紀ごろに成立した『華嚴経』の「如来名号品」においては、大日如来の名として知られる「毘盧遮那（ヴァイローチャナ、衆生を遍く照らす方）」という名は、釈迦如来が須弥山の四方の大陸で呼び称されていた十種の名前の一つでした。つまりもともとは大日如来は釈迦如来の別名だったのです。『華嚴経』によれば、涅槃の後、肉体を離れたブッダの教えが毘盧遮那という法身^{ほっしん}となって世界をあまねく照らしたとされています。これがさらに『理趣経』という密教の經典になると、毘盧遮那が大毘盧遮那となり、密教の教主となっていきます。

現在の密教の教義では、大日如来は悟りと宇宙の真理そのものであり、釈迦如来はそれを現実世界にもたらす大日如来の重要な化身であるという定義がなされています。胎藏曼荼羅の中には「釈迦院」があり、大日如来の教えが伝播するための重要な位置を担っています。教主の名が変わっても、釈迦如来の偉大さが変わるわけではないのです。

■「曼荼羅」と「まんだら」

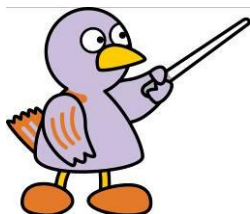
日本語の〈まんだら（斑）〉の語源は「曼荼羅」であるという説があるそうです（『日本仏教語辞典』（岩本裕／著 平凡社 1988.5）ほか）。「曼荼羅の図相が色とりどりであることから、「種々の色のいりまじった」意。」とありますが、本来の曼荼羅の意味からすると、これはちょっと違うことになるわけですね。

「まんだら」という言葉が本来の意味を離れてこれだけ広範に使われている国というのは、日本くらいかも知れません。図書館の資料の中にも「～まんだら（「マンダラ」、もちろん「曼荼羅」や「曼陀羅」といった表現も）」というタイトルのものが多数あり、それらの内容はどちらかというと本来の「曼荼羅」

より上記の「斑」に近い意で用いられているものが多いように感じられます。これは本来の密教に携わる方々や研究者にとっては迷惑なことかも知れませんが、上記の垂迹・浄土曼荼羅のように、外からきた思想を取り入れて新たなオリジナルを生み出すというのまた、とても日本的な気がします。大切なのは、本来のあり方を知った上で、現在のあり方を愉しむという発想・姿勢ではないでしょうか。その意味でも、本来の密教世界の曼荼羅を、まずは一度じっくり鑑賞してみてもはどうでしょう。

※なお、今回の展示およびこの資料案内を作成するにあたり、下記にあげた資料以外に、各種百科事典（『世界大百科事典（平凡社）』『日本大百科全書（小学館）』『ブリタニカ国際大百科事典』）および各種仏教事典・辞典類を参考にしました。資料によって内容に多少の差異がある場合もありましたが、その中では新しい内容もしくは多数派を占める内容を主に採用しています。

県立熊谷図書館にある今回の展示資料



～「曼荼羅」の世界～



※『書名』（著者名 発行者 出版年）【県立図書館の請求記号】

掲載資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで5月23日まで展示中です。

◆ 曼荼羅とは？

- 『日本宗教文化の構造と祖型：宗教史学序説』（山折哲雄／著 東京大学出版会 1980.8）【160.2/7】
- 『大日本仏教全書 第52巻 図像部2』（鈴木学術財団 講談社（発売） 1971）【180.8/タ/52】
- 『図説日本仏教の世界 4 曼荼羅の宇宙』（集英社 1988.12）【182.1/ズ/4】
- 『現代語訳＊大乘仏典 6 密教経典・他』（中村元／〔著〕 東京書籍 2004.2）【183/ケン/6】
- 『曼荼羅ルネサンス：21世紀を開くコスミックパワー』（朝日新聞社 1991.3）【186/A82/】
- 『秘密マンダラの世界』（八田幸雄／著 平河出版社 1988.4）【186/H43/】
- 『曼荼羅の世界』（真鍋俊照／著 朱鷺書房 1984.9）【186/Ma43/】
- 『マンダラは何を語っているか（講談社現代新書 1066）』（真鍋俊照／著 講談社 1991.9）【186/Ma43/】
- 『絵でわかるマンダラの読み方：心の宇宙を歩く』（寺林峻／著 日本実業出版社 1989.10）【186.8/エ/】
- 『マンダラの理論と実践』（ジュゼッペ・トゥッチ／著 平河出版社 1984.11）【186.8/ト/】
- 『曼荼羅：色と形の意味するもの（朝日カルチャーブックス 19）』（松長有慶／編 大阪書籍 1983.3）【186.8/マ/】
- 『曼荼羅イコノロジー 増補改訂』（田中公明／著 平河出版社 1987.8）【186.8/マ/】
- 『曼荼羅の鑑賞基礎知識』（頼富本宏／著 至文堂 1991.10）【186.8/マ/】
- 『曼荼羅のみかた：パターン認識（岩波グラフィックス 20）』（石田尚豊／著 岩波書店 1984.4）【186.8/マ/】
- 『曼荼羅美の世界』（真鍋俊照／著 人文書院 1980.10）【186.8/マ/】
- 『図解・曼荼羅の見方』（小峰弥彦／著 大法輪閣 1997.7）【186.81/スカ/】

- 『図解・曼荼羅の見方：カラー版』（小峰彌彦／著 大法輪閣 2009.9）【186.81/効】
- 『図説・マンダラの基礎知識：密教宇宙の構造と儀礼』
（越智淳仁／著 大法輪閣 2005.10）【186.81/ゼ】
- 『曼荼羅』（神奈川県立金沢文庫 2008.4）【186.81/マン】
- 『曼荼羅入門』（福田亮成／著 ノンブル社 1992.9）【186.81/マン】
- 『密教美術とマンダラ：特別展図録』（神奈川県立金沢文庫 1997.10）【186.81/ミツ】
- 『密教の文化（講座密教4）』（宮坂宥勝／〔ほか〕編集 春秋社 1977.12）【188.5/コ4】
- 『密教・コスモスとマンダラ（NHKブックス486）』
（松長有慶／著 日本放送出版協会 1985.9）【188.5/ミ】
- 『密教とマンダラ：その万華鏡的世界』（頼富本宏／著 日本放送出版協会 1990.9）【188.5/ミ】
- 『密教瞑想と深層心理：阿字観・曼荼羅・精神療法』（山崎泰広／著 創元社 1981.5）【188.5/ミ】
- 『密教（講談社選書メチエ310）』（正木晃／著 講談社 2004.9）【188.5/ミツ】
- 『密教の話：曼荼羅の世界 新装版』（金岡秀友／著 潮文社 1993.2）【188.5/Ka46】
- 『空海と真言密教』（読売新聞社 1982.11）【188.5/Ku27】
- 『梅尾祥雲全集 第4巻 曼荼羅の研究』
（高野山大学密教文化研究所／編 臨川書店 1982.2）【188.5/Tb21/4】
- 『続真言宗全書 第24 曼荼羅部』（続真言宗全書刊行会 1986.5）【188.5/Z5/24】
- 『空海密教の宇宙：その哲学を読み解く』（宮坂宥勝／著 大法輪閣 2008.1）【188.52/ウ】
- 『密教の象徴世界 八田幸雄／著』（平河出版社 1989.4）【188.56/ミツ】
- 『マンダラ図鑑：密教文化の宇宙観』（西上青曜／著 国書刊行会 1991.2）【D186.8/マ】

◆ 「両部曼荼羅」を観る

- 『『金剛頂経』入門：即身成仏への道』（頼富本宏／著 大法輪閣 2005.5）【183.7/コン】
- 『『大日経』入門：慈悲のマンダラ世界』（頼富本宏／著 大法輪閣 2000.10）【183.7/タイ】
- 『伝真言院曼荼羅：世界文明の縮図（サンブックス）』
（小久保和夫／著 石元泰博／写真 サンブライツ出版 1978）【186.7/テ】
- 『両界曼荼羅の誕生』（田中公明／著 春秋社 2004.8）【186.81/リヨ】
- 『梵字仏のすすめ』（石塚青我／著 日貿出版社 1983.11）【D186.7/ホ】
- 『復原高雄曼荼羅』（宮原柳遷／画 佼成出版社 1975）【D186.8/ミ】
- 『両界曼荼羅の智慧』（石田尚豊／著 東京美術 1979.5）【D186.8/リ】
- 『彩色金剛界曼荼羅』（染川英輔／著 大法輪閣 1996.10）【D186.81/リイ】
- 『曼荼羅の研究（図版篇・研究篇）』（石田尚豊／著 東京美術 1975.11）【D186.81/マン】
- 『両界曼荼羅：東寺蔵国宝「伝真言院両界曼荼羅」の世界』
（石元泰博／著 平凡社 2011.11）【D186.81/リヨ】
- 『曼荼羅図典』（染川英輔〔ほか〕／著 大法輪閣 1993.2）【R186/So36】

◆ さまざまな曼荼羅

- 『インド古典論 上』（宮坂宥勝／著 筑摩書房 1983.8）【126/イ1】
- 『大日本仏教全書 第58巻 図像部8』（鈴木学術財団 講談社（発売） 1971）【180.8/タ58】
- 『マンダラ探検：チベット仏教踏査』（佐藤健／著 人文書院 1981.6）【180.9/マ】
- 『星曼荼羅の研究』（武田和昭／著 法蔵館 1995.10）【186.8/ホ】
- 『マンダラの世界（美と宗教のコスモス1）』（松長有慶／編 講談社 1983.7）【186.8/マ】
- 『マンダラ：チベット・ネパールの仏たち』
（国立民族学博物館／編 千里文化財団 2003.3）【186.8/マン】
- 『図説曼荼羅大全：チベット仏教の神秘』
（マルティン・ブラウエン／著 東洋書林 2002.9）【186.81/ゼ】
- 『図解・別尊曼荼羅：密教図像を読む』（小峰彌彦／監修 大法輪閣 2001.1）【188.5/スカ】

『大日如来の世界』(頼富本宏／編著 春秋社 2007.11)【188.5/タイ】
 『マンダラの密教儀礼』(森雅秀／著 春秋社 1997.12)【188.5/マン】
 『世界の聖域 8 ヒマラヤの僧院』(講談社 1981.6)【D160.8/㏞/8】
 『ラダック曼荼羅：岩宮武二写真集』(岩宮武二／写真 岩波書店 1987.5)【D186.8/㏞/】
 『マンダラ蓮華：アルチ寺の仏教宇宙 (図録巻・解説巻)』
 (加藤敬／写真 平河出版社 1985.2)【D186/Ka86/】
 『マンダラの理論と実際：特に現代の深層心理学を考慮して (叢書／仏教文化の世界)』
 (ジュゼッペ・トゥッチ／著 1992.5)【D186/マン/】

◆ 「曼荼羅」思想の展開

『現代哲学の冒険 15 ゼロ・ビットの世界』
 (市川浩／〔ほか〕編 岩波書店 1991.4)【108/㏞/15】
 『湯浅泰雄全集 第5巻 東洋精神史1』(湯浅泰雄／著 白亜書房 2001.7)【108/㏞/5】
 『日本思想大系 20 寺社縁起』(家永三郎／〔ほか〕編集 岩波書店 1975.12)【121/㏞/20】
 『個性化とマンダラ』(C. G. ユング／〔著〕 みすず書房 1991.9)【145.9/㏞/】
 『異界の交錯 上巻 (宗教史学論叢 10)』(細田あや子／編 リトン 2006.2)【160.4/㏞/1】
 『近世の宗教と社会 1 地域のひろがりと宗教』(吉川弘文館 2008.5)【162.1/㏞/1】
 『立山信仰と立山曼荼羅：芦峯寺衆徒の勧進活動 (日本宗教民俗学叢書 4)』
 (福江充／著 岩田書院 1998.4)【163.1/㏞/】
 『立山曼荼羅：絵解きと信仰の世界』(福江充／著 法蔵館 2005.7)【163.1/㏞/】
 『神道史の研究：宮地直一博士30年祭記念論文集』
 (宮地直一／〔著〕 叢文社 1980.11)【170.2/㏞/】
 『大日本仏教全書 第49巻 威儀部1』(鈴木学術財団 講談社 (発売) 1971)【180.8/㏞/49】
 『大日本仏教全書 第51巻 図像部1』(鈴木学術財団 講談社 (発売) 1971)【180.8/㏞/51】
 『大日本仏教全書 第63冊 当麻曼荼羅註』
 (仏書刊行会／編纂 名著普及会 1978.11)【180.8/㏞/63】
 『仏教民俗学大系 3 聖地と他界観』(名著出版 1987.12)【182.1/㏞/3】
 『山岳まんだらの世界 (日本列島の原風景 1)』(川口久雄／著 名著出版 1987.12)【186/Ka92/】
 『当麻曼陀羅絵説き 改訂新版』(鷲津清静／著 白馬社 1987.3)【186/W44/】
 『観経曼陀羅図説』(後藤真雄, 吉田哲雄／共著 東洋文化出版 1980.11)【186.8/㏞/】
 『仏教美術と歴史文化：真鍋俊照博士還暦記念論集』
 (真鍋俊照／編 吉川弘文館 2005.10)【186.8/㏞/】
 『曼荼羅の思想』(鶴見和子／著 藤原書店 2005.7)【186.81/㏞/】
 『毛髪で縫った曼荼羅：漂泊僧空念の物語 (新典社選書 31)』
 (日沖敦子／著 新典社 2010.3)【188.62/㏞/】
 『歴史の中の都市と村落社会』(田中喜男／編 思文閣出版 1994.10)【210.04/㏞/】
 『南方曼陀羅論』(鶴見和子／著 八坂書房 1992.9)【289.1/㏞/】
 『熊野観心十界曼荼羅』(小栗栖健治／著 岩田書院 2011.2)【D186.81/㏞/】

上記以外にも、県立図書館では曼荼羅や密教に関する様々な資料を所蔵しております。

お探しの資料がありましたら、お気軽にお問い合わせください。

